

正義の味方が箱庭入りしたそうですよ？

雄良 景

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

——ある一人の人間えいゆうの話をするでしょう。

——ばかばかしく、しかしだからこそ美しい

——そんなどうしようもない理想を追い求めた、一人の人間こどもの話だ。

これは、可能性の一つであつたひと欠片の『正義の味方』が星見の天文台を経て箱庭で『しあわせ』に至るお話。

|| || || || || || || || || ||

エミヤ♀がノーネームでオカンしている話を読みたすぎて書いてしまった…

ノーネームにすっかりとした保護者ポジが欲しくてつい。子供たちと遊んで欲しくてつい。

よくクロスオーバーやオリ主もので、矛盾点の撃破や矯正モードがあるのを見ますが、じゃあちゃんとした保護者ポジにすっかり導いていただくお話も欲しいですね？という欲望の産物でござす。古き良き母のようなエミヤ♀を目指すでござす。

ただしほのぼのオンリーではない。なぜならfateだから。ギャグや日常回はある。なぜならfateだから。あれもこれもそれもまた運命fate。

カーニバルなファンタズム？どこかの家の今日のごはん？そして

——Heaven's Feel。

——あとは、分かるな？

作者はわりとせつせと伏線（もどき）を用意してはいますが、自分で見返しては「伏線に見えない。私が読者だったら解釈違いと判断して即プラウザバックするわ」と恐々としています。かなり雑。言いたい事がまとまってなさ過ぎて何言いたいのかわかんない。それでも良いという心優しい方のみ、自己責任でお読みください。

(ツイッター垢↓@dosankofrog)

## 目次

あいすべきばかなひと

prologue—one	: かつて夢見た美しき	—	1
prologue—two	: 桃源郷にグッド・バイ	—	13
prologue—three	: 理想に忠実な	—	22
prologue—final	: 希望はまだ捨ててはいけな	な	

あいすべきばかなひと

prologue— one : かつて夢見た美しき

—— 『英雄』の話をするでしょう。

—— 古今東西、世界には様々な『英雄』が存在する。一覧表なんて作ろうものなら広辞苑をゆうに超えるだろうさ。

—— 今回はその一部をちよつとおさらいしてみようか！

—— 例えばケルトの英雄『クー・フリーン』。彼は父親が太陽神だね。

—— インドの英雄『カルナ』の父親も太陽神だ。で、異父兄弟の『アルジュナ』だつて神様の息子というのも知っているね？ よしよし。

—— あとは、『ギルガメッシュ王』や…『イスカンダル王』にも神様の血が流れていると言われているねえ。

—— さあて、ここでクエスチョン！『そも、英雄とは何ぞや』。

—— まあ三者三様、十人十色な回答がある質問だけれど、そうだな…ここでは『人智を超えた偉業を成し遂げた者』としようか。

—— ふむ、念のため、『アーラシユ・カマンガー』くんは除外しておこうか。フアラオ基準では彼は『勇者』だからね。フアラオの英雄観もなかなか興味深いものだ。ああ、実に。

—— え？ 質問してきたのに答えを聞いてくれないのかだつて？ いやいや、前代未聞な君の英雄観<sup>マスター</sup>なんてめちやくちや気になるに決まっています！

—— このカルデアの英霊召喚システムつてかなり無茶苦茶で判定ガバガバだし、英霊にもめちやくちや干渉されて面白くないね。本来の聖杯戦争じゃ呼べない面子まで石と運で釣りあげちゃうし…え？ そこにかかる苦勞？ うーんその話はまた今度ね！ 来世くらいに聞くよ、長くなりそうだし。

——まあ私は世界が滅びないと死なないから来世なんてないのだけれど！ 夢魔ジョークだよ。どうか？

——話を戻そう。ええと、どこまで話したかな。え？ 回りでどくて長い？ 簡潔にダイジェストで話せ？ ええ…流石に酷くない？ あ、酷くない。はい。絶対話聞かなかったの根に持つてるよね…

——まあいいや。で、だ。英雄が生まれるのには『超常的な何か』：つまり『神仏』だとか『神秘』だとかが関わってくる確率が非常に高い、という認識をしてもらえばいいよ。統計的な話だけだね。

——『ジークフリード』は邪龍を討ち滅ぼし

——『ジャンヌ・ダルク』は神の声を聴いた

——100%人間として生まれても、どっかで祝福を貰ったり災いを贈られたり、だいたいはその時代の神秘に見合った結果とかが付いてくる。ほら、『ドラゴン』なんて神秘の薄い現代じゃお目にかかれないうだろう？ ああいうのを、『英雄』が生まれるための『必要悪』とでもいうのかな…いや、この話はやめよう。場合によっては君の保護者に袋叩きにあいそうだからね！

——ああ待って急かさないで！ つまり本来、神秘が薄れるに比例して新しい『英雄』というのは産まれにくくなっていくわけなのだけれども。

——だから…ああ！ 君が急かすから話がごちゃごちゃになっちゃったじゃないか！ こんなんじゃあ語り部として名乗れないよ。

——もう、仕方ないなあ。じゃあ本題に入るけど、

——君は『彼』を『英雄』だと思ukai。



「それで、その問いに君は何と?」

「…んー…:…なんか———分かんなくなっちゃってさあ」

薄暗い夜の食堂で、そつと二人分の声が響く。ひとりはカウンターに座り、もうひとりは小さな音を立てながらキッチンで作業をしながらの会話だった。食器のこすれる音だけの静かな空間には、話し声がよく響く。

昼間は賑わうこの場所も、夜更けは他に人影はなく、しかし、夜の静けさが背徳感を煽り自ずと声を潜めてしまう。

「…:『英雄』の定義が『人智を超えた偉業を成し遂げた者』なら———  
——『あの人』は『英雄』と呼ばれるんじゃないかなって、思った」

カウンターに座っているひとり———多くの英霊にマスターと呼び慕われる子供の声はどこか不安定で、迷子のように揺らいでいた。

「思った、ん、だけど…」

言い淀んだそれを、しかし相手は気にするそぶりを見せない。その手はただ黙って作業を続けた。

——『英雄とは何ぞや』

最期に見た背中を思い出す。神との決別。全能の王は奇跡に願い、只人となった。しかし彼は、今際の際に願いを捨てた。

それが、正しいことであるかのように。

「———いやだなあ、って、思っちゃった」

そつと、小さな声で子供から零されたのは、歳に見合わない癩癩の

ようで、しかし——その子供の確かな本心だった。

「別に、英霊がやだとか、変な意味じゃないんだよ。でもさ、なんか、だって……」

——コト、

整理のつかない感情を荒ぶらせたような子供の声が、ふと——  
——止まる。

いつの間にか俯いていた視界に、柔らかい白が割り込んだからだ。

——それは、キッチンで作業していたもうひとりが話を遮るように置いたマグカップ。

置かれた白いマグカップ。何の変哲もない無地のそれからは柔らかい湯気が出ていて、見るだけで暖かいとわかる。

思わず子供は誘われるように手を伸ばし、口を付けた。

——ああ、甘い。ミルクセーキだ。

「…………お、いじ、い、」

子供の声が、震える。

温度は飲みやすい適温で、やけどをしないように熱すぎず、けれど温まるようにぬるすぎず。その繊細なひと手間が目の前の優しい人の心遣いを感じた。

じんわりと、夜の冷たさに侵されたような体に温かさが沁み込んでいく。

優しい味だ。悪い夢を見たとき泣く子供のためにお母さんが作ってくれたような、甘くて優しい味だった。作った人の優しやが溶けた味だった。

——グツと、目頭が熱くなる。子供はどうしようもなく泣きたくなった。

優しい気持ちになったからだ。幸せな気持ちになったからだ。



——ああ、あの人にもこうやって、あつたかいものを…たくさんたくさん渡したかった。渡せばよかった。渡せるはずだったんだ、いくらでも。

今は全てが繋がってしまふ。何もかにもが後悔となつてこどもを締め付けてくる。

『後に悔いる』から『後悔』。使い古された皮肉が子供の胸を焼く。恥も見分もなく、みつともないくらいに泣きわめいてしまいたくなつた。

「…——どくたーが、えいゆうになるのは、やだなあ…」

それでも涙を流せなかつたのは、複雑な思春期のちっぽけなプライドか。それとも——背負っていた世界という重圧の弊害か。

もうひとりには、何も言わない。ただ、子供の横にそつと座つて変わらず話を聞き続けた。

「ドクターは、ヘタレでチキンで、ゆるふわで、ちよつと頼りなくて、」

——本当に？

「ほんとですんごく頑張つてて、たくさんたくさん頑張つてくれて、」

——俺が見ていたドクターは、本当に彼の本心だったの？

「俺、俺は、そんなドクターが、——大好きで、」

——俺が甘えてしまつていた彼は、俺をどう思っていたの。

「立香」

ぼろぼろと言葉が零れ出す。そこにはたくさんの感情が溶けていた。何より、言葉の裏で彼を疑つてしまつている自分の心が苦しかつた。

悲しい。寂しい。苦しい。怒りもある。整理のつかないぐちゃぐちゃの気持ちをひっかきまわすと吐き気がした。苦しさから逃れる

ために彼の優しさを十字架にかけようとしている自分の心が醜くて仕方なかった。

零れる声は内容に反してか細く冷たく。かえしの付いた針のように子供に刺さる。音になった重たい気持ちは子供を埋め尽くし窒息させてしまいそうで、だからこそ、もうひとりが名前を呼ぶ。

それは静かな声だった。それでいて、優しい声だった。

『英雄』の定義は千差万別だと言われたのだろうか？ まったくもってその通りだ。あの男が言った『人智を超えた偉業を成し遂げた者』というのも数多ある答えの一つに過ぎない。——この問いに、正解はないのだから」

優しい声が子供の心に沁み込んでいく。隣から伝わる体温が温かい。

「…ああ、そうだな。例えば私にとって、英雄とは——

——『背中』だった」

俯いてもうひとりの言葉に耳を澄ませていた子供は、思わず顔を上げた。

『背中』。そのワードで思い出すものがある。あの時、あの瞬間、あの人がかつての願いを捨てたとき——ああ、ならばあの方は本当に、『英雄』になってしまふのだろうか。

——いや、違う。そうじゃない。子供は思いとどまる。

歯を食いしばるように考えを留める。結論に駆け寄るな。まだ、この優しい人の声をちゃんと聞け。答えはきつとそこじゃない。

子供の瞳に光が差していく。それは沈んだ夜に朝日が昇るような美しさがあつて、もうひとり小さく笑ってしまった。

そうだ。この、諦めが悪くて素直で誠実な子供が、多くの英雄に慕われたその心のありようなのだと、何かと比べるように。

「いい感情だけを抱くわけじゃない。実際酷く憎く思ったこともある。隣にいても遠い。走っても走っても手が届く気がしない。——  
——それなのに、諦めきれずに手を伸ばしてしまう。自分の中の理屈じゃないところがどうしようもなく『憧れ』てしまう。嫌いでも、遠くても、その『背中』に追いつきたいと思ってしまう。」

「彼女たちは紛れもなく——『地上の星』で、」

『英雄』は、私にとって——『あこがれ背中』だった」

それは、どこか幼さを孕んだ声だった。それでいて、なんだかとても納得してしまうような声だった。

きっとその言葉は、小さな子供がいつの日か抱きしめた、柔らかい光の色をしていた。

きっとその音には、歴戦の老兵がかつての優しい記憶に思いを馳せるような、鋭い柔らかさがあった。

頭の中の呆けたところが、彼女がこういった心情を吐露してくれるのは珍しいなあ、とズレたことを思う。それが自分のためだと子供は理解していた。だから子供はこの優しい人がどうしようもなく大好きだった。

『憧れ』———そうか。

『追いつきたい背中』———ああ、そうか。

「立香。ロマニ・アーキマンは君の『英雄』だったかね？」

「——ううん」

今度こそ——子供ははつきりと、自分の心を決められた。そこに、自分の『英雄観』を持って、子供は確かに、否定することができた。

「…うん、うん、違うなあ…：ドクターのこと、すごいとは思うけど、『英雄』じゃないよ。」

あの瞬間、彼の背中を押したのは何なのだろうか。彼に階段を上らせたのは誰だったのだろうか。もう、想像することしかできない。いつか、彼の人生とは本来ならありえないボーナスステージで、いつ消えるともわからない幻影きせきだったのだと誰かが言っていた。それでも確かにそこにはあったのだ。彼が生き抜いた、『願じんせいい』が、十年間があったのだ。

かけがえのない尊いもの。それを、あの場で捨てることで——  
—世界を救うための一步を踏み出してくれた。

それは義務感だったのだろうか。使命感だったのだろうか。正義感だったのだろうか。

彼の心はもう本人に聞くことができない。  
けれどただひとつ、子供にも分かることがあった。

彼は、懸命に生き抜いた十年間の答えを示してくれた。

この世界を——愛しているのだと。  
子供はただ、その美しさに応えたかった。

瞼の奥で思い出す。ふわふわの髪の毛を揺らしながらびっくりした顔の初対面。そのときの会話を、鮮明に思い出す。

ベッドの上で、嬉しそうに微笑んだ彼と交わした、社交辞令のような、他愛もない、宝物のような会話を頭の中でリフレインする。

「ドクターは『友達』だから」

子供の頬がやんわりと緩む。それは、心からの笑顔だった。

ゆるふわなあの人。リアクションがオーバーで、怖がりだったあの  
人。臆病なくせに、嘘つきで、優しかったあの人。大好きな、『友達』。  
彼にかけてくれた言葉が、笑顔が、本物かどうかなんてどうだって  
いいんだ。そんなことは悩むほどのことじゃない。

なぜなら彼はあの時、確かに信じてくれたはずだから。十年間分の  
人生を、費やした成果を、あの玉座の前で俺に託してくれたから。  
それこそが何人も侵すことのできない真実だった。

——もうひとりが増えてくれた彼女の英雄観。例えばそれ  
に彼を当てはめてみたら、なるほど。まったくダメだ！

背中なんて追っかけない。そもそも、そんなに後ろに居たらあのゆ  
るふわが転んだときに助けてあげられないじゃないか。——  
だから、隣で一緒に歩かないと。

並んで一緒に、生きていかないと。

『うわあい、やったぞう！』：：なんてね」

「ふ、彼の真似か？」

「似てるでしょ？ 自信あるんだ」

「ああ、そっくりだった」

「へへ：：なんかいちごタルト食べたくなってきたなあ」

「なら、明日のおやつはそれにしようか」

既にお互いの声は柔らかく、そこには温かさがあった。

なぜ英雄になってほしくなかったのか。なぜあれほど拒絶感を感  
じたのか。最初は全然わからなかった。未知の不快感。だからなお  
さら嫌だった。

出どころも、落としどころも分からないようなそれが、あまりにも  
苦しくて——

——けれどもう、大丈夫。

今ならわかる。それは多分きつと、寂しかったのだ。彼への否定の

ように感じてしまったのだ。

英霊のみんはすでに終えた人生があつて、だから今をボーナスステージだという。自分たちがすでに過去のものだという認識がある。もちろん、そうでない人もいるけれど。

ただ、それを彼に当てはめたくなかつただけ。そうすることで、彼を、『ロマーニ・アーキマン』という一人の人間の人生を、否定してしまうような気になつただけ。

—— だからもう、大丈夫。

彼の声を、笑顔を、思い返すだけで視界が熱く滲んでしまうけれど。大丈夫だよ、愛しい人。きつといつか、美しい空耳になる。——

—— 人間はそうやって、明日を生きていくのだと教えてもらったから。

そつと、子供は手のひらを握りしめる。そこには自分だけの答えがあつた。壊れないように、なくさないように、尊いものを慈しむように。

明日は朝イチでこの答えをあのロクデナシに叩きつけてやろう。

—— ああ、そうだ。自分の見つけた英雄観と一緒に。

隣に座る人を見つめる。『英雄とは何ぞや』。俺はそれに、どう答えるのか。

『英雄とは』。思い返す旅の思い出。出会った人々。『英雄』。そして今、隣にいる人。

いつも、皆が導いてくれた。進む先を照らしてくれた。怖いこともたくさんあつた。絶望に膝をついたことだってあつた。その度に、彼らの、彼女らの背中が恐ろしいものから守ってくれた。支えてくれた。先に進むことを、願うことを、許してくれた。

だから、どんな状況だって皆がいれば大丈夫だって————そう、信じる事ができた。

導いてくれるもの。照らしてくれるもの。希望をくれるもの。

—— 決めた。

藤丸立夏にとって『英雄』とは——『みちしるべ』だ。  
その言葉で、背中<sup>ま</sup>で、生き様<sup>よ</sup>で、『後世<sup>ま</sup>の人々<sup>う</sup>』に『未来<sup>み</sup>』を<sup>ち</sup>示して  
くれるもの。

みんながいるから、いてくれたから、俺は、俺たちは、自分の未来<sup>え</sup>を<sup>ち</sup>生きていけるから。

「ねえ——エミヤ」

子供はもうひとり——エミヤに話しかける。

どうか届けと、願いながら。

忘れないでと、祈りながら。

彼にできなかった後悔を、繰り返さないように。

たくさんの感謝と、親愛をこめて。

「ありがとう——大好き」

叙事詩のない無名の英雄。厳しくて、暖かくて、面倒見がよくて、優しい——優しい、カルデア<sup>み</sup>の英雄<sup>ち</sup>。

いつかの悪意の生贄にされた少年は嗤っていた。「優しいイ？」

まっさか！『アレ』はどうしようもない『歪み』だぜ。——狂つてんのさ。」

——けれど子供は何度だって、それを『優しい』と呼びたかったから。

「いつか、いつかエミヤも——」

——薄桃色が舞う

「ああ、君もそれを願うのだね。」



Prologue—two: 桃源郷にグッド・バイ

——長い、長い夢が、終わる。

宙そらに浮かぶ錆びた齒車

荒れ果てた荒野に突き刺さる無数の武具

救いのない丘の上——彼女は一人、夢に浸る。

——およそ一年。あまりに長く、あまりに……満たされた時間だった。

浮かんだ意識を抱きしめて、静かに目を伏せ思いを馳せる。

極限の一年間を経て、人理は修復された。

どうにもできぬ事情により一時退避となったが、そちらの方は万能の天才や数奇の名探偵が中心となって手を回していたのだからどうにかなるだろう。

不安はある。心配もある。しかし最善は尽くした。——もともと、人理修復後の敵については話が出ていたのだから、不覚の事態にはなりえないだろう。

——おおよその推測は、どれも当たってほしくはないものだが——  
——世界と言うのはいつだって理不尽なのだから。

かわいらしい子らだった。手がかかる、純粹で、一生懸命な、子供だった。

明日を夢見る、命の輝きを持った、まだ幼い子らだった。

心配に決まっている。それでも、どうしようもないことというのはあるのだ。

「皮肉な話だな。人間を害する悪を滅ぼすのは英雄だが、その英雄を殺すのは人間だ」

英雄にならなくてはいけなかった子供。あの子の人生はあまりにも波乱万丈すぎた。

恐ろしい話だ。身震いする。世界はこの時代に、新たな英雄を作り上げようとしたのだ。

明確な敵。

数多の冒険。

多くの出会いと別れ。

手を取り合うヒロイン。

偉大な仲間。

ただ一人のマスターと言う重圧と孤独。

不屈の胆力と、成長と、勝利と喪失の末の——あつかい不遇。

認めるわけにはいかない。許すわけにはいかない。世界にあの子を好き勝手させはしない。

それがどれだけ残酷なことかを、『私たち』は知っているのだから。あの二人がよりそい必死に歩んできたその姿を知っている。その輝きを知っている。

あの美しさを奪わせはしない。

—— 仕掛けは上々、後は結果をご覧くださいろ、というわけだ

世界を救った子供。なら、次は子供が救われる番だろう。……もちろん、世の中がそんな都合よくできているとは思っていないけれど。善意とはおおよそにして使いつぶされるものだ。擦り切れるまで、無くなるまで。

—— けれどあの子たちにはカルデアの英雄がいる。

各々の叙事詩で数多の活躍を記された英雄がいる。『反英霊』であつてもあの子たちのために力を行使してくれる味方がいる。

ひと癖以上もある手に負えないような連中もいあるが——

きつと、大丈夫だろう。

カルデアはそういうところだった。そんな奇跡を生んだ場所だった。

それに、早く手を打たねば過激派の連中が「次は世界があの子を救え」と言わんばかりに暴れ始めかねない。

「もう少し、頑張ってくれたまえ」

——必ず、君たちを救ってみせるから。

ふと、我ながらあまりにはつきりとした物言いに、少しの笑いがこみあげてきてしまう。

皮肉屋だとまで言われた身が、随分と丸くなったものだ。——

——昔みたいには？

それは気に食わんな、と頭を緩慢に振る。別に戻ったわけじゃない。戻れるわけがない。いち度知ってしまったえば、知らなかった頃になど戻れない。

ただ、あのカルデアで。戦場に立ち、戦い、かと思えばキッチンに立ち、奉仕し。

そんな奇天烈な日常が、尊かったのだ。

料理を作っていればいつも思った。そうだ、こんなのを作ってみよう。作ってみたことがある。喜ぶだろうか。喜んでくれたことがある。

文化も違う英傑たちに振舞うには緊張感があつたが、口に含んだのち綻ぶ顔を見ていれば、かつて愛した何かの影がちらついた。

カルデアにいる生身の人間であるスタッフたちも、激務の中少しでも気休めになればと趣向を凝らしてみた料理に、心からの笑顔を向けてくれた。

「ありがとう」——そう言われるたびに、ひび割れた何かの奥にあるものを思い出しそうになる。

暖かな瞳をする彼らに、この瞬間、自分は確かに世界の明日を支えているのだというような……馬鹿な自己満足を抱いたものだ。

それでも、誰も傷付けない仕事は、たしかに胸の奥の何かをくすぐった。

この一年を思い出す。荒唐無稽の奇々怪々な冒険録を思い出す。いったい誰が予想できた？ たった一人の一般人こどもが、名だたる英雄英傑と共に世界を救ってみせるなど！

悪夢があった。絶望もあった。それでもあまりに輝いていたのだ。命の輝きに満ちた時間だったのだ。

遠い、『記憶』。

—— かつて呼ばれた聖杯戦争で、一つの悲劇があった。

本人に言えば殺されそうだが、あの時のどこかの私にとっては悲劇にしか見えなかったその記憶を、おぼろげながらに引っ張り出す。

かつて『恋』によつて絶望に落とされた一人の女が、死後に『本当の恋』を得た話だ。

悲劇だ。死すでに終わったものに人いまをいきるものと生すでに終わったもの者の恋に何が残せるのだと。しかも相手は魔術師ですらないときた。彼女は自身が現世に留まるだけの魔力を自身でどうにかしなくてはいけない。それどころか、愛する者へ寄り添うために実体化する分の魔力を考えれば、いくら優秀な魔女である彼女でも手こずる案件だ。

たとえば二人で慎ましく生きていこうとも、ハイエナのように嗅ぎつけた魔術協会や聖堂教会、カルト連中や飢えた魔術師どもに追い掛け回されることになるだろう。

そして、浮世離れた彼女に違和感を感じる人間も必ず出てくるはずだ。孤独の中で、自分を置いて老いていく愛する人を看取ることになる。

悲劇だ。救われない。手に入れた恋があまりに尊く、儂く、だからこそ彼女は救われない。

—— そう、思っていた。

カルデアの『記憶』を思い出す。本来の聖杯戦争と違い人理が脅かされた大事に『世界』が反応したのか、召喚された英霊は随分と『本体に近く』、だからこそ『記憶が明確だった』。

——笑った女が居た。泣いた男が居た。かつて失われた何かを取り戻した女が居た。ようやく無念を晴らすことができた男が居た。

——敵対することで、たどり着いた答えがあった。

——味方として召喚よばれるされることで、ようやく手を取り合うことができた誰かが居た。

数多の英雄が集った人類の最後の砦——そこは、誰かの夢見た桃源郷

——救いはあったのだ。無意味ではなかったのだ。あの時の私は、何を物知り顔で憐れんでいたのだろうか。

——そも、自分もまたあの聖杯戦争で『答えを得た』にもかかわらず。

——彼女は知っていたのだ。その恋の残酷さも、美しさも。だからあんなにも、強く恋焦がれ、深く愛したのだろうか。

——そうだ、死後であろうと、虚構であろうと、たどり着く場所は必ずある。

——死んだ者が今更と、生まれすらしなかった者が何をと、蔑まれることもあるだろう。

——けれど、それでも、あそこには正しいうつくしいものがあった。

——かつて朽ちた誰かの花が、咲くことを許された場所だった。

——私で、さえも。

——星が瞬く。

——それは、ずっと手放せなかった夢だった。

何度現実には打ちのめされても、残りカスになるほどに精神が磨耗しても、聞き分けの無い駄々っ子のように手放せなかった、夢だった。それでも、そんな資格は私にはないのだと、奥に、奥にしまい込んだ夢だった。

「世界を滅ぼす悪に、手を取り立ち向かう。————まるで、『正義の味方』のようじゃないか」

恵まれていた。満たされていた。それがあまりに幸福すぎて、——  
——恐ろしかった。

——こんな幸福を、私のような存在が享受していいのだろうか。

ふとした瞬間に積み重ねた屍が足元で囁く——お前にそんな資格があるものかと、恨みを込めて睨み付けてくる。

……それでも、忘れたくないと、思うのだ。

どれだけ願っても、磨耗していく魂はいとも容易く思い出たちをこぼしてしまうのだろう。

あの魔都と化した新宿で——魔殿となつた油田基地で生まれた、私の可能性のように。いつか私も、何もかもを抱えることすらできなくなってしまうのだろうか。

——ああどうか、許してはくれまいか。奪わないでくれないか。これさえあれば、もういいから。千を越える苦痛も、万を数える呪詛も、億に至る絶望でさえも、超えてゆけるはずなのだから。

そんな贅沢を、許してくれ。

瞳の奥で、星が瞬く。

桃源郷には期限があつた。期間限定の夢なのだ。

永遠は存在しない。ゆえにそこには美しさがあるのだと説いたの

は誰だったか。

人は欲深い。与えられた幸福を恐れ多いと慄いておきながら、無意識だろうと手を伸ばす。

与えてくれと縋りつく。

「あの子たちには見せられない姿だ」

少なくとも、私のことを『頼りになる大人』として見てくれていたあの子供たちには見せるわけにはいかない。

それはちっぽけなプライドだけれど、私にとって胸を張って誇れたことなのだから。

みつともない人間になってしまったけれど。重ねた罪に溺れてしまいそうになるけれど。

あの子たちが私に安心を抱いてくれることは、誰に誇ったっていいはずだ。それが、……私の罪を知らないからだとしても。

——不意に、甘い香りを感じた気がした

——そうだ、そういえば、あの夜

二人ぼっちのあの静かな夜。

あの子と私が過ごした、あの一晩。あの子は私に、何と言ったのだったか。

——『記録』がめぐる。

静かな声で、万感の思いを込めたような音で。

あの子は私に、何を伝えたのだったか。

「しあわせに」

そうだ——しあわせになつてと

「しあわせ——しあわせに」

あの子の青い瞳が瞬く幻覚を見る。

『わがママをいって自分を愛して』とあの子が言う。

私は——不幸な人間に見えたのだろうか。

たとえそうだと——私に、この身に降りかかる不幸を、  
嘆く資格があるのだろうか。

我が身を、愛する資格があるのだろうか。

少なくとも、私は私を愛せなかった。

——それは花の香りのような気がした

「しあわせに——」

このタイミングであの子の言葉を思い出すだなんて、自身の自分勝手さにはほとほと嫌悪を抱く。

心を込めて贈ってくれた言葉を、都合のいい免罪符にしようとして  
いる我が身のなんと醜いことか！

それでも、ほんの少し

あの輝かしい桃源郷を、覚えておくこと



そんな———そんな些細な夢なら、あるいは

「わたしの———しあわせを」

———瞬間、世界が塗り替わる

「ああ、やっとか」

「君って随分と頑固なものだから、必要なピースが揃うのにこんなに  
かかってしまったよ」

「———それでは君に、夢のような時間を」

Prologue—three:理想に忠実な

ごう ごう

めら めら

炎が燃えます。まちが燃えます。

お空には真っ黒なたいようが昇り、たいようは黒い涙を流してしくしくと泣いています。

しく しく

めそ めそ

涙はたくさんあふれてきて、まちを燃やしてしまいます。

しく しく

めそ めそ

子供が泣いています。一人ぼっちで泣いています。

周りには誰もいません。おとうさんもおかあさんもいません。

ふら ふら

とぼ とぼ

子供は歩き始めました。目的地はありません。いえ、もしかしたらあつたかもしれませんが。

けれど子供にはもう、何もわかりません。

よた よた

のろ のろ

なんで歩いているのでしょうか。どこに向かっているのでしょうか。何が欲しかったのでしょうか。

子供にはもう、何もわかりません。

ごうごう

めら めら

まちが燃えています。人も燃えています。

まだ息のあるいのちが、子供に手を伸ばします。

たすけて あついで くるしい くるしい たすけて

たくさんたくさん声かけられます。でも、子供は何もできません。

子供の小さな手では、何もできません。ぼろぼろの体では、誰も救えません。

ごめんなさい ごめんなさい ごめんなさい

やがて子供は力尽き、その場に倒れ込んでしまいます。

ごめんなさい ごめんなさい ごめんなさい

ごうごう

めら めら



「ああ——よかった」

■

「質たちの悪い悪夢よ、こんなもの」

「だって全然納得いかないもの」

「全部よ！ 全部！ 道理にかなってないわ。理不尽よ」

「あんたが納得しても私は納得できない」

「ねえ、■ ■ ■。あんたは——しあわせになるべきよ」

■

「■ ■ ■。私、■ ■ ■のこと、大好きです」

「私を救ってくれた人。私を見つけてくれた人」

「地獄の幕開けのようだった毎朝が、あなたのおかげで美しいものになりました」

「あなたに会えると思っただけで、先の見えない暗闇のようだった明日が待ち遠しくて仕方なくなりました」

「ねえ、■ ■ ■。どうかあなたも——しあわせになってください」

■

「本当にしようがないんだから」

「でもいいわ、私はお姉ちゃんだから」

「私たち、兄妹きょうだいなもの。そうして、姉弟きょうだいなもの。ふたりぼっちの、家族かぞなもの」

「私の兄。私の弟。私の家族。愛しい子」

「ねえ、■ ■ ■。あなたに——しあわせを贈ってあげる」

■

「優しい子。そういうところ、本当に切嗣さんにそっくりだったわ」  
「あの人がいなくなつてから、小さな■■■を守るのは私だつて、ずっと思つてたの」

「それがいつの間にか随分と大きくなつて、安心安心つて思つたのに」  
「おつきくなったのは図体だけじゃない。……本当に、変わらなかつたのね」

「ねえ、■■■。こんどはちゃんと——しあわせを教えてあげたいの」

■

「■■■。私の鞄。我がマスター。私が愛した、ただひとり」

「あなたは私を尽くただの女の子のように扱おうとしました。当時はそれに思うところが多くありましたが」

「あなたの性質をよく知れば知るほど、その言動の真意にどうにも照れくさく感じたものです」

「きつとあれは、まぎれもない私の幸福の形でした。私にとってあなたは、あまりにまばゆいものでした」

「ねえ、■■■。いまは只のひとりとして、私はあなたの——しあわせを願います。」

■

「ほとほと呆れかえるぜ。あの皮肉屋の正体が小僧と知ったときはひっくり返るかと思つたが」

「魂や精神と一緒に愛嬌まで削り節みたいにしやがつてよお。このひねくれもんが」

「あれだけのいい女にこそつて『しあわせ』を願われて祈られて、だのにテメエはそのザマつてんだから甲斐性無しにもほどがあらあ」

「だがま、いい加減その辛気臭せえ澄まし面も見飽きたところだ」

「なあ、■■■。それでもお前が『しあわせ』に成れないつてんな

ら、そんなときや俺が——『おまえのしあわせ』をくれてやるよ」

「ねえ、■■■■。俺はさ、結局■■■■のことをほとんど知らないんだ」「でもさ、■■■■の作ったご飯は美味しくて、たくさん心配してくれて、怒ってくれてて、皆のことをよく気にしてくれてることは知ってるよ」

「無名だつていうけど、すんごく頼りになることも知ってる」

「それにね、きつと聖杯戦争に出たことがあるんだろっうなあ、とか………たくさん、たくさん、いろんなことが有ったんだろっうなつて事とかも、ちよつと分かつたよ」

「だからね、■■■■。あの夜あなたがくれたみたいに、あなたにも——  
——しあわせを、たくさんもらってほしいなあ」

■

ぎい ぎい  
ぎい ぎい

きしむ音が響きます。

ぎい ぎい  
ぎい ぎい

それは縄がきしむ音です。

ぎい ぎい  
ぎい ぎい

それは縄に吊られたなにかが揺れる音です。

ぎーい ぎい  
ぎい ぎい ぎい

これでいいのです。これでいいのです。

これが正しい形なのでしょう。—— 何にとつて？

これがあるべき姿なのでしょう。—— そんなの誰が決め  
たというの

いいのです。いいのです。

彼／彼女はこれでいいのです。

めでたしめでたし、ハッピーエンド。

彼／彼女の骸の上で、みんなは幸せになりました。

だからこれで——

■

「いいわけないでしょ」

■

——ものがたりに、続きを追加しましょう

「あんだ、馬鹿よね。ほんとうに馬鹿。」

「好き勝手やって、こんなくたばり方して」

「でもいいわ。あんだがそうするなら、私も—— 私たちも、好き勝手にするんだから」

—— 本編すら霞むような、盛り沢山の蛇足を加えましょう

「頑張ってるヤツには、頑張った分だけ報酬がないと納得がいかない

のが私だもの」

アフターストーリー  
の二次創作

—— 原作すら食いつぶしかねない、夢物語のような荒唐無稽

—— 読者から匙を投げられそうな、ご都合主義の主人公補正  
だつて添えて

—— 友情も努力も勝利も、きれいなものはところ構わずつぎ  
込んで

—— たくさんの温かくてやわらかくて優しいもので満たし  
てしまえばいいのです。

—— だつてこれは、私たちがあんたへ贈る、私たちのための  
『ものがたり』。



prologue—final：希望はまだ捨てては  
いけないな

「やあ、私はみんなの頼れるお兄さん！　そしてこれはお供のアンリ  
たん」

「フォウフォーウツ！（c.v. 寺○拓篤）」

■

「おはようございます、先輩！」

「おはよう、桜」

■

「じゃじゃじゃじゃーん！　ここで抽選結果の発表です」

「ふんだんに含まれた依怙最良と好みと趣味で選ばれた被害者はく  
らくどうるるるるrrrrrrr………デン!!」  
ラッキーボーイ

■

「私が悪い子になったら——どうしますか？」

■

「ばーん！　ここで飛び出てジャガジャガー！」

「ちなみに今のは『ジャジャジャジャー』と『ジャガー』をかけてい  
たのであった…分かったかな？」

「えっ、私二番煎じ？　うっそー！」

「君に決めた！」

「ヒューヒュー！ やるじゃねえか豪運ボーイ！ んえ？ ああ、コッチはガールだったか」

■

「むむむっいい匂いです…シロウ、今日の晩御飯は何ですか？」

「おっと、危ないぞセイバー。えっと、今日は貰い物のタケノコを使つて…」

■

「選ばれたアナタには豪華景品をプレゼント！」

「テツテレー、『片道切符』！」

■

「あなたが欲しい」

■

「テツテレー！ リベンジよ！」

「古き良き効果音による場面の転換を狙える最高のパフォーマンス…キてるわこれは！」

「え？ マジで？ 既出？」

「もはや分かり合えぬ」

■

「きゃーっ！　ちよ、ちよつと衛宮君！　この機械壊れてるわよ、どうすればいいのよー！」

「いや、それは壊れてるんじゃないやなくて今遠坂が壊したんじゃない……」

■

「今どこからか野生の怒りのようなものを感じたような気がしないこともないようなあるような気のせいのような……まあいつか！」

「それより何だよその胡散臭さそうな顔はよく、豪華景品なんだから喜べよ」

「切符には見えない？　そりゃあ、『切符の役割を担う手紙』だからね。え？　いらない？　ふふふ、実は君の意見は聞いてないぞう！」

■

「悔やむのはここまでよ。悩んでいる暇があったら行動するのが私の信条」

■

「おっ！　そろそろ順番来るかしら??　ジャガーの華麗な出番の気配を察知！」

「いや〜困っちゃうわ〜！　あまりの華麗さと大人の色気と野生の雄々しさでリスナーのみんなをメロメロにしちゃうかもしれないわね〜！」

「えっ、出番ないの?」

「もはや通じ合えぬ」

■

「ねえシロウ、また明日も会ってくれる？」

「ああ。……イリヤの好きなもの、たくさん作ってやるよ」

■

「渡してもどうせ君は読んでくれないだろうから私が今ここでご開帳さしあげよう！ 何なら音読サービスも今なら無料さー！」

「俺も中身までは知らねえんだよな」

「えーつと……」

■

「そうよ。好きな子のことを守るのは当たり前でしょ」

■

「え？ あの子のことよく見てるねって？」

「うーん、なんか気になるのよねえ。ジャガーの野生にビビビっとくるのかしら」

「なんとなく、責任みたいなのを感じるのよ」

「けど、ここにいるあの子は楽しそうだから」

■

『『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。その才能をキョウト試すことを望むのならば、己の家族を、友人を、財産を、世界のすべてを捨て、――

――我らの『箱庭』に來られたし』』

「ヒーツ！ ヒヤハハハ！」

「うーむ、あそこで転げまわってる彼は放っておいて、うん、これは実に『少年少女』によく刺さるだろうさ。年頃の子供にとつて、ままたない不満や承認欲求を満たしてくれることへの希望は馬鹿にできない

いからね」

「ヒツヒビ……ん、はーっ、笑った笑った！ ケケケ、面白い口説き文句だったけど……これは不相応じゃねえか？」

「うんうん、これは『君』へ贈るにはちよつと変だね。よし、書き換えようか！」

■

「よお坊主！ 今日の晩飯、俺の分も作ってくれよ！ 材料費はちゃんと出すからよ！」

「いつて！ ちよ、分かったから背中叩かなくてくれよランサー！」

■

「アんだとコラ！」

「羨がなっていないと言ったのだが……理解できんかね？ クー・フリーン 狗ー！」

■

『理想と犠牲の生贄であつた少女に告げる。君を愛した輝かしい少年少女の願いのもとに、『君のしあわせ』を手に入れるために。――』

——彼の『箱庭』へ招かれたし』

「なんか厨二感増してね？ って、お？ その顔はやーつと気づいたか。そうそう、これは俺らの独断専行じゃねえってことだよ」

「土台はもともとあつた。そこに種がまかれて――――ようやく芽が出たのさ」

■

――それは人類史を守る戦いの中での話。

「——こんな遅くまでご苦労だな、ドクター」  
「ひよえっ!? びびび、びっくりしたあ」

——とある静かな、夜の会話。

「夜食のデリバリーだ。食べられるかね？」

「えっ！ いいの？ やったぞう、ありがとう！」

——いずれ消える男が、それでも確かに存在していた話。

「ところでドクター、とある筋から君がもう3日ほど満足に休息を取っていないとのタレコミがあつたのだが」

「むぐっ！ むぐぐーっ」

「ちよっ、ええい！ 一気に詰め込むからだ！ 大丈夫か!？」

「ごっくん！ げほっ、だ、誰がそんなこと…レオナルドの奴だな…」  
「まあタレコミがなくともめつたに食堂に姿を見せない様子から、時間がないか味付けが好みでないかだと思っていたが。…その様子だと、君、後者だな」

「ぎっくう！ い、いやまさか、今日だってほら、こうしてマイルームに帰ってきているわけだし…」

「マイルームでこんな夜中まで仕事をしていることを、医療界では『休息』と呼ぶと？」

「呼びませーん…」

「…君が、何を考えているのか。何を抱えているのか。何を、望んでいるのか」

「……………」

「正直、君は不審な点が多い。『なぜか英霊に辛辣な態度を取られる』ことごとくしても」

「え、いやそれは彼らの好みじゃないかなあ？」

「様式美のように毎回罵られておいてか？」

「うっ」

「——けれど」

「……………」

「信じよう、君を。少なくとも、私は。——『あの子たち』を見る君の顔を見て、疑い続けるのはあまりに難しい」

「君は」

「だからこそ、ロマニ・アーキマン。私は君を、疑い続けることにした。」

「……………ああ、君、……………君、お人好しだよねえ」

「ただの職務分担だ。好都合にも私はキツチンを預かる一人に据えてもらっているのね。職員や英霊の様子はよく見える」

「君のご飯は好評だよ。職員にもね」

「光荣だな。まあ、めつたに食堂に出来ない人間に言われたところで嫌味に聞こえるが」

「ハイすみません」

『何か』があれば、『私がしよう』。君は少し、背負いすぎに見える。生きていく人間が背負うには多すぎるだろう。こういう時は使えるものをよく使うといい」

「——そう、見えるのかい」

「? ああ、容量を超えたものを抱え込みすぎだ。君に何かがあれば、君をよく慕っている立花もマシユも、悲しむだろう。もう少し自分を大切にしまえ」

「うん——うん、ありがとう。ところで、わざわざこんな話をするためにお夜食を持ってきてくれたの?」

「まさか、ついでだとも。その夜食は君への善意と好意のものだよ。まあ、こんな皮肉屋に氣遣われたところでうつつとおしいかもしれんがな」

「君ってたまに自虐入るよね……………」

——なんでもない夜の、些細な会話だった。



「君はきつと怒るかな。けど——君だからこそ、この選択を否定しないだろう?」

「自分を大切にしようにと——言ったはずだったのだがな」

■

「そうそう、ねえ、君。君って実は、ロマンくんのこと嫌いだっただろう?」

「うわっ、ブツこむなあんだ」

■

「人に負けるのは仕方がない。けど自分には勝てる。諦めろと囁く自分にだけは、いつだって抗える」

「理想を抱いて溺死しろ」

■

「おっと時間だ! それじゃあ堪能してきてくれたまえ」  
「じゃなく」

■

——唐突な暗転。そして明転。

「は…?」

——ビュオオオオオオオオオオオ  
!!!!!!

頬を噴き上げていく風



重力にかき回されるような内臓の不快感

眼下に広がる謎の都市と、それを覆うように広がる天幕のような何か

そして地球の理論に正面から喧嘩を売っているとしか思えない、断崖絶壁の地平線

そこは――

「――なんですか!!!」

――どうあがいても完全無欠の異世界だった。